

vol.21

特集 **artistique**

Bonjour

● ボンジュール
アーティストック
<artistique>

秋の日に
アートの種を蒔きました。
君の心に
豊かな実りを...

ASSOCIATION NIIGATA FRANCE ● 発行人 ● 新潟・フランス協会 新潟市中央区東堀通6-1038 (丸屋本店店内) TEL・FAX 025 (225) 2424

金森 穂

Jo Kanamori

リョーとびあ新潟市民芸術文化会館舞踊部門芸術監督
Noism芸術監督

寺山 修司 (1935-1983)
迷宮オペラ「青ひげ公の城」

ペロウの童話やバルトークのオペラにもなった中世フランスに伝わる、妻をめぐっては次々に殺したという青ひげ伝説をモチーフに、寺山流の仕掛けを満載した舞台である。

～あらすじ～

一人の少女が劇場を訪れると「青ひげ公の城」という芝居が演じられようとしている。しかし、七番目の妻を演じるはずの少女の前に、正体不明の舞台監督や過去に青ひげ公の妻を演じた女優たちが次々に現れる。肝心の青ひげ公が現れないうちに次々と起きる殺人事件。いつしか少女は衣装係の言葉に導かれ、彼女の兄の話や劇場の秘密を知ることになるが、青ひげ公は依然、姿を見せない。主役不在のまま、少女は現実と幻想が奇妙に交錯する劇場の迷宮をさまよいつつ始める。



高松 智子

Tomoko Takamatsu

ユニバーサルカラーインスティテュート 代表

ヨハネス フェルメール

Johannes Vermeer (1635-1675)

「The Milkmaid」(牛乳を注ぐ女)

未だに脳裏に深く焼きつき感動した絵画に、光の天才画家として知られているフェルメールの作品があります。中でも「牛乳を注ぐ女」の作品は格別です。45.5×41cmという小さな作品ですが、その存在感は非常に大きく目を見張ります。普通の日常

の一場面を描いた「牛乳を注ぐ女」は、フェルメールのもっとも著名な作品の一つですが、光の効果の表現と色彩の使い方、技法が随所に見られます。特に壁や衣服、パン、籠、陶器などの質感の描写や陰影の効果、光沢表現などが巧みに描かれていて非常に素晴らしく、暫くじっと釘付けとなり見入ってしまいました。白い壁のグラデーションを背景に、黄色の服に青のエプロンという色彩の対比的効果と、赤いスカートのコントラストはとても美しいです。パンの粒々など光が当たっている明るい部分には絵の具を厚塗りし、素材感が美味しさを出しているところなど、沢山のトリックはまるでマジックを見ているようで必見です。



高橋 秀樹

Hideki Takahashi

新潟大学人文学部 准教授

「La Dame la licorne」(貴婦人と一角獣)
6枚のつづれ織り

クリュニー中世美術館(パリ)に所蔵されている六枚のつづれ織りが私のお気に入りです。鮮やかな赤の地に、貴婦人、獅子、一角獣などが中央に大きく描かれており、優雅で綿密な表現は大変見ごたえがあります。同時に、布地全体にわたって小花や

小動物のモチーフが所狭しと織り込まれているのですが、簡潔に表現されているながら一つ一つが可愛らしく、眺めていると微笑まずにはられません。これらがどのような事情で制作されたのか正確なところはわからないことが多いのですが、フランス王シャルル7世時代の廷臣ジャン・ル・ヴィストが何らかの形で関わっていて、パリで下絵が描かれフランドル地方で15世紀に織られたと考えられているようです。ミュージアムショップで同じ柄で作られたクッションカバーが売られていました。二枚買ってきて自宅と職場に置いてあります。毎日見っていますが、他と取り換える気になりません。



広野 光子

Mitsuko Hirono

ピアノ講師

フランス ジャン マルセル プーランク

Francis Jean Marcel Poulenc (1899-1963)

最近、気になっている作曲家にプーランクがいる。数年前テレビで彼のオペラ「声」を見た。一人の女性が恋人と電話をしながらの感情の起伏を浮き彫りにした異色作である。コクトーの奇抜な原作と相まって、私には、音楽も斬新で奇妙な印象しか持てなかった。その後、私は彼の音楽物語「ぞうのババル」を演奏する機会があった。フランス語の朗読が入り、物語の情景が浮かんでくる様を親しみ易いメロディ、私

はメルヘンの世界にすっかり魅せられ、弾いていて楽しかった。そして最近、彼の素敵なお曲に出会った。彼自身大変気に入っているというピアノ曲で即興曲の中の一曲だ。「エディット・ピアフをたたえて」という題がついている。サティも作曲家仲間だったプーランクは、シャンソンの女王エディット・ピアフとも親しくしていた様だ。枯葉が風に舞い、パリのカフェで恋人達が語り合うかの様なこの曲は、短いながら実に魅力的な曲だ。自由に揺らすこともでき、弾いていて気持ち良い。柔らかいデュフィの絵も浮かんでくる。決して大げさにはならず、心地良いメロディに酔った色合いをつける洒落た仕上がりだ。プーランクとの出会いは、これからまたありそうな気がする。



湊元 マルティーン Martine Tsumoto

フランスインフォサビス

クロード モネ

Claude Monet (1840-1926)

「Aiguille de Port Coton」(木綿港の針岩)

ブルターニュ地方最大の島、ベル＝イル島は南ブルターニュに位置し、その光と色彩、様々に変化する輝きにより、有名な画家クロード・モネのほか多くの芸術家をとりこにした、尽きせぬインスピレーションの源なのです。

1986年の9月、数日間の滞在と心に決めて島に渡ったモネは2ヶ月も逗留しました。滞在中にモネは39枚の絵を描きました。その中の一枚がオルセー美術館に展示されている「Aiguille de Port Coton」(木綿港の針岩)です。名の由来は、時化がくると、

並び立つ針のように尖った岩の群れに泡とともに風浪が吹きさすさび、木綿のペールで覆われたようにみえるからです。

若い頃漁師をしていたポリットという世話好きな男がいました。モネについて妻にこんな手紙を書いています。毎日画材を携え、入り組んだ海岸と切り立った断崖をモネに見せようと険しい島の道を通っていったが、厳しい雨に降り込められたある日、モネが自分の絵を描き始めたというのです。ポリットの絵はパリのマルモタン美術館で見ることができます。今日もお、島の様々な色彩とブルターニュの美の特質である手つかずの自然は、多くの画家や写真家を魅了し、靈感を与え続けています。

そのほか、島にはたくさんさんの画師、画家のアトリエがあります。これらの油彩画、水彩画、パステル画、モザイク画を見る時、私たちはモネを始めとする画家たちが島を歩きながらきつと抱いたであろう感動を、彼らが独自のタッチで描いた感動を追体験するのです。



ナントとこころどころ

~ Nantes, au gré des vents ~ ナント、風の吹くままに

大西洋からの風がよく吹く港町ナントの魅力を伝えます。

第4回

「La rentrée : une rapsodie administrative (新学期協奏曲)」

酒井麻里

9月～10月、フランスではあちこちで「La rentrée」の文字が躍ります。「新学期」というこの言葉は、動詞rentrer(帰る、戻る)から来ているのですが、「新」学期なのになぜ「再び入る」という意味のrentréeを使うのだろうか?と不思議でした。*「和文仏訳のサスペンス」によれば、入る人は新しくても、制度自体は繰り返されるから、なのだそう。そんな新学期は外国人学生にとって疲労困憊の時。授業は楽しみだけれど、行政上のあらゆる手続き、大学の登録や学生ビザ申請という難関が待っています。ビザ申請のために、この時期だけ大学まで県庁職員が出張してくれるのですが、たった2人の職員が捌ける人数は一日30人程。整理券を求めて朝から様々な人種の学生が列を作ります。長時間並んでもお昼にはきっちり終了、午後の受付も時間通りに再開されることはないという完全仏式業務形態の上、用意した書類に落ちがあれば即追い返されてしまいます。たどたどしく意味不明なフランス語で理解不能な訴えをする人々に職員たちの機嫌も悪くなる一方。やっとビザの受取りを予約できたら、今度は学部の授業登録です。私の所属していた文学部では、各単位の実習クラス(40人程)の授業に「クラス争奪戦ラリー」なるものが行われます。一つの科目を2～3人の教授が担当し、それぞれ扱うテーマが違うため、興味のある先生に申込みなくてはなりません。しかし人数制限があり、登録は早い者勝ち。そこで、先生たちは各教室に別れて申込みリストを携え待ち構え、よーい、どん、で約300人の生徒が目当ての先生の所へ走り、リストに自分の名前を書いてもらうのです。ダブルブッキングや登録ミスが巻き起こす混乱は避けられず、授業初日の午後には、夏休みで鈍った心身に鞭を打つようなスケジュールに、学生たちは「Salut!」の代わりに「Crevé(e)(死ぬ…)」と挨拶しそうになるのです。



*「和文仏訳のサスペンス-翻訳の考え方-」
大賀正喜、G.メランベルジェ 共著 白水社 1987年 p.20

お知らせ

petites annonces

●入会のお誘い

年会費/個人会員 5,000円 学生会員 3,000円
法人会員 30,000円

申込先/事務局または各会員へ
事務局:(株)丸屋本店内 ☎FAX 025(225)2424

●ホームページ随時更新。

Bienvenue au site de l'Association Niigata-France!



新潟・フランス協会へようこそ!

URL ☞ <http://anfrance.com/>

●次号予告

Bonjour < Voyage > は春号発行予定です
「旅」を特集します。

覚えて使おう、フランス語 で挨拶!

leçon français

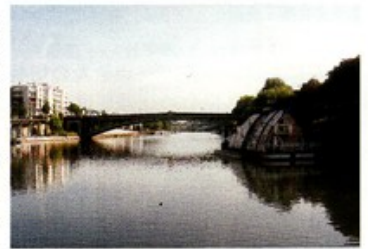
	おはよう	こんばんは	おやすみ	さようなら	またね	やあ	元気?	ありがとう
	Bonjour	Bonsoir	Bonne nuit	Au revoir	À bientôt	Salut	Ça va?	Merci
	ボンジュール	ボンソワール	ボヌ ニュイ	オルヴォワール	アビアント	サリュ	サヴァ	メルスイ

事務局通信

actualité

事務局長 本間 強

錦秋が越後を染める季節となりました。新潟・フランス協会の事業活動も佳境を迎え、皆様のおかげで多くの活動が進められております。恒例のバスツアーは去る10月4日、約3



0名の参加により長野市の東山魁夷館で作品を鑑賞の後、小布施に向けフランス料理と地ワインを頂き、町歩きを楽しんできました。さて、いよいよナント市エロー市長が新潟市を訪問されることが決まり、10月26日に新潟・フランス協会と新潟市の共催で歓迎会を開催する運びとなりました。姉妹都市締結後、初めて訪問されるエロー市長ご夫妻をはじめ6名のナント市代表団を心より歓迎をしたいと思います。また11月23日にはプチ・サロンを開催致します。講師は、先頃1年間のフランスでの生活を終えられ帰国された協会理事・白井ゆみさんをお願いしました。また新潟・フランス協会によるナント市との交流事業、ナント・パリ訪問の旅(11月9日出発、14日帰国)を計画致しました。新潟が誇る三味線演奏家の小林史佳さんがナント市のオペラ座で公演されることになり、アトランティック・ジャポン協会共々せいっぱい応援をしたいと存じます。講座関係では、フランス文化講座、廣田功先生によるフランスの地方料理を学ぶ講座が11月で終了致します。37名の受講者から絶賛頂いております。酒井麻里さんのフランス語講座も秋シリーズが始まりました。内容充実の楽しい講座が行われております。12月は恒例のクリスマス例会が行われる予定ですが、いずれも楽しく、内容の濃い充実した活動を基本に準備を進めてまいります。理事一同、頑張りますので、会員の皆様にはご参加、ご協力のほどをお願い申し上げます。

編集後記

pas à pas

アートを特集した今回の「ボンジュール」は、会報そのものが「アート」であったかもしれない。会報委員長としての私は、原稿の校正が上がってくるまで編集委員に任せっきりであったから、校正段階では驚きを禁じ得なかった。黒を基調とした全体デザインもさることながら、Noismの金森穰代表やストラディヴァリアのダニエル・キュイエ代表など取材を通して、アーティストとしての目標や人柄に触れる記載は、単なる情報伝達のための会報ではないことを自覚させられた。会員の紹介を通じて、それぞれのアートに対しての寄稿は新機軸であると思う。しかし会報の個性を失ってはならないが、また独善に陥らないことにも思いを致したい。次回の特集「旅」は会報委員の中で論議されているが、詳細はここで発表するよりも、楽しみにして頂くことの方が大切ではないかとあえて触れないでおきたい。12月に別冊・法人会員特集を発刊予定なので、こちらも楽しみにお待ちしております。(t)